

## 23.5度の傾き

わが地球の地軸は  
23.5度ほど傾いているが  
自然の摂りだ

もうままもろすじいスピードで  
太陽のまわりをグルグルと  
まわっている  
おまけにその宇宙ごとだ  
人生なんか 四年生きてても  
一瞬だ

ケンカしたり戦争したり  
している場合じゃありません。  
みんな23.5度傾いているんだ

## よく生きる

(伊勢原くだけかけ会「無一可」より)

己の安全を願って  
まわりに 囲いと柵を設ける人は 苦しみの人

己の安全を願うのは誰しも同じことと思います。だからと言って心の面で防衛的になることはとても辛いことになるのです。防衛のための心の囲いや柵とはどんなものなのでしょう。

囲いや柵というのはいわばカプセルのようなもので、外の世界と仕切るとか区別するという、閉じるものです。心の面でのそういうものは、たいていは気分的なものです。「イヤだから」とか「ちよつと体調が」とかの理由で自分の中に閉じこもるとい言わばブレーキ感情に振りまわされるのです。

苦しみてそんなことから発生することがあるのです。そう言えば「苦しみの人」ってそんな面があります。どんなことにも「よかつたね」とは言えません。自分の都合や事情に合わなければ心のバリアーをグルリに設けて何かのせいにして

て真向勝負を避けようとしています。要するにたいた理由でもないものがとつても大きく感じてブレーキ感情として働いてしまうのです。

それが無いのが 明朗闊達な人のあり方だ  
柵に頼り囲いを堅持するのは 愚人の姿だ

苦しみの人は明朗闊達ではありません。ですからぼくはアチコチの「くだけかけ会」で「正しく悩もう」と言っているのです。正しく悩めば苦を持つていても明朗でいられます。正しく悩めば柵や

囲いの正体がわかります。時には自分が正しく実力者であることを鼻にかけ、時にはいつまでも学歴や資格にしがみつき、時にはダメな自分をさとりられないように取りつくりい言葉でごまかそうとし、時には暴力や力づくで人を支配しようとし、そしていつも人と比較してばかりいる自分は、ア

イツより自分は上だ、下だ、と心が騒いでいる。そのためいろいろな意味で「苦しみの人」になつていくのです。不平不満を言い、足りないものばかり勘定して、「ああしなきゃよかつた」「こうすればよかつた」と過去を振り返り、今の自分を柵や囲いで防衛し、この先の欲を満たそうとす

るのです。

人は須らく愚をやめ 賢を楽しむべし

愚をやめるとどうなるのか？ いや待てよ、愚とは普通世間一般の「苦しみの人」から考えると賢い生き方と想っていることばかりです。柵や囲いがなかつたら自分は危ういと思うからこそ、そこにしがみつくのですから。

そうすると、今まではくらがが大雑把に「愚と賢」と思っていたことを反対にしてみたらどうだろうか？ まあそこまで全部を裏返して見てみることもできないこともあるけれど、ガツガツかせごうとしていたものをフーツと力を抜いてユツタリ見ると、時には暴力や力づくで人を支配しようとし、そしていつも人と比較してばかりいる自分は、ア

イツより自分は上だ、下だ、と心が騒いでいる。そのためいろいろな意味で「苦しみの人」になつていくのです。不平不満を言い、足りないものばかり勘定して、「ああしなきゃよかつた」「こうすればよかつた」と過去を振り返り、今の自分を柵や囲いで防衛し、この先の欲を満たそうとす

ないのは、捨ててしまえば無防備になつてしまうのではないかという不安からです。この社会(世の中)で、うまく生きてやろうとするからです。自分の立つ処が失われると思うからです。

「愚と賢」が逆転することは考えられません。無防備で生きることの不安が先立ちます。愚をやめ賢に移つても足元の崩れることはないと思えば安心して手を放すことができるのです。

早ければ早いほどよいのがこの移り変わりだ  
すべての瞬間がそのチャンスだ

「くだけかけ」では、人生の悩みのはじまる思春期、とくに14歳に着目して、それ以前にこういう「人生観」を提供していく努力をしているのです。それには共同生活がもっともよい方法だと思つてい

ます。生活合宿等を実行しているのはそのためです。また、実はこの移り変わりはちよつと手こずりはしますが何歳からでもできますし、家庭という共同生活の中でできることです。どの瞬間にでも愚から賢へ移ることはできるのです。

よく生きる ために

「よく生きる」というのは、娑婆世界で「うまく生きる」という世間や社会を相手にすることを第一にするより、まず「自分」を精いっぱい、力いっぱい生きていく方に目を向けていくのですが、それにはどうしても「自分(私)」というものがどんな意味を持って生きているのか？ また、なぜ「自分(私)」という意識が与えられているのかを考えてみなければなりません。そこに、柵や囲いのハードルが見えてくるので

※本文中の太字の部分は、和田重正の言葉を引用しています。原本は「無一可」和田重正著(くだけかけ会刊)に掲載されています。併せてお読み下さい。



山の茂吉(和田重良)  
1948年、小田原生まれ。東京教育大卒。くだけかけ生活舎(神奈川県丹沢山中)を定場にした共同生活(人生科や農作業中心)の実践をおこなって、誰もが安心して暮らすことのできることを願い、35年以上にわたって青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送り続けている。